

第5回世界水フォーラム(トルコ・イスタンブール)参加報告 ～河川再生の視点から

和田 彰

はじめに

第5回世界水フォーラムが、3月16日(月)～22日(日)にかけて、「Bridging Divides for Water(水問題解決のための架け橋)」をテーマにトルコ・イスタンブールで開催されました。今回のフォーラムには、150を超える国々から、30,000人を超える水関係者が集結し、100以上のセッションにおいて様々な水問題の解決策について議論が行われました。

今回の特徴の一つは、「気候変動と水問題」を軸に、水災害をはじめとする気候変動に伴う地球規模での変化と水管理に関する適応策が盛んに議論された点にあります。言わば、「地球温暖化」が主役のフォーラムでありましたが、本稿では、あえて「自然環境」「生態系」「河川再生」という視点から、現地での様子でJRRN事務局の立場でご報告させていただきます。

世界水フォーラムとは？

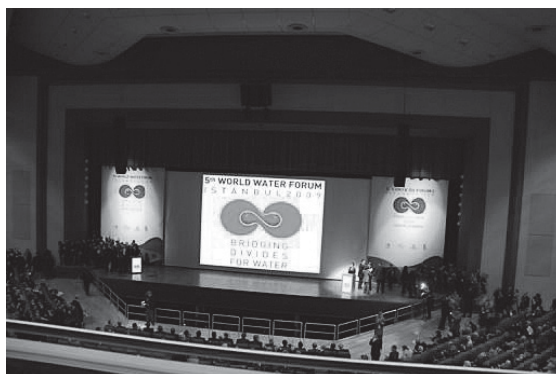
はじめに、世界水フォーラムについて簡単に紹介させていただきます。1996年に発足した民間シンクタンク・世界水会議(WWC)が中心となって運営する国際会議で、第1回のもロッコ(マラケシュ)以降、3年に一度の頻度で開催されています。第2回のオランダ(ハーグ)、第3回の日本(京都・滋賀・大阪)、そして第4回のメキシコ(メキシコシティ)に続き、今回はアジアとヨーロッパを結ぶ拠点として栄えるトルコ(イスタンブール)の地で開催されました。

毎回のフォーラムには、各国政府関係者が多数参加し、また閣僚宣言も出され、世界の水問題に関し議論する水分野の世界最大イベント

となっています。

第5回世界水フォーラム開会式

3/16(月)午前には開催された開会式では、主催者である世界水会議(WWC)会長や開催国のトルコ共和国大統領、また日本の皇太子殿下など各国要人による開会挨拶が行われました。



第5回世界水フォーラム開会式の様子

皇太子殿下による基調講演

3/17(火)午前には、皇太子殿下による基調講演が行われました。「水とかわる～人と水の密接なつながり」をテーマに、日本における水と人々の関わりについて、皇太子殿下のご専門とする歴史的視点からの考察に基づいた歩みが紹介され、水と調和した暮らしを営んできた日本の水の歴史が1200名を超す聴講者に紹介されました。

ご講演の中でも特に印象に残ったのが「土地に刻まれた水の記憶は簡単には消えることは無い」というお言葉で、水に関わる土木遺産を調べることで当時の人と水の関わりが理解でき、

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局



皇太子殿下による基調講演

歴史的な教訓を今後も生かしながら発展していくべきという内容の素晴らしいご講演でした。

World Water EXPO

第5回世界水フォーラムに併せ、同じ会場にて「World Water EXPO」が開催され、様々な国や国際機関による水に関わる取組みを紹介

する展示が行われていました。

日本からは、行政機関から4団体、公益法人や研究所から8団体、また民間企業として5社の合計17団体が出展し、日本が培った水に関わる技術や施策等が紹介されていました。

展示内容や手法に各国のカラーが出る中で、開催国のトルコやオランダ、ポルトガル、韓国など、出展組織ごとの縦割りのな展示ではなく、国がチーム一丸となって展示するスタイルを取る展示場が、特に参加者の注目を集めていたように感じます。

また展示テーマでは、上下水道や浄化技術といった技術・製品に関わる展示が多い中で、今回の水フォーラムの中心的なテーマである「気候変動」に関わるパネルが多かったのも特徴と言えます。

一方で、河川環境や生態に関わる展示はあまり多くない中で、韓国展示場における韓国政府



日本パビリオンの様子



中国パビリオンの様子



韓国パビリオンの様子



オランダパビリオン

の「Eco-river21プロジェクト」や、韓国仁川市と地元NGOが取り組む河川環境再生に関する展示は特に目を引きました。



韓国河川再生NGOブース

河川再生に関連するセッション

今回のフォーラムは、以下の6つのテーマ及びサイドイベントとしての特別セッションで構成され、気候変動と水災害管理、飲料水や水衛生、水と食糧問題やエネルギー、越境流域水管理、ガバナンス、資金、教育など様々な水問題が議論されました。

テーマ1 : Global Change and Risk Management

テーマ2 : Advancing the Human Development and the MDGs

テーマ3 : Managing and Protecting Water Resources

テーマ4 : Governance and Management

テーマ5 : Finance

テーマ6 : Education, Knowledge and Capacity Development

こうした中、河川再生に関連するセッションとしては、舟運や生態系保全、また越境河川管理をテーマとしたものがありましたが、いずれの講演や討議においても、世界中が注目する「気候変動問題」とそれぞれの問題をどのように関連付けて解決していくかという点が盛んに議論されていたように感じます。以下に、そ

れらセッションの概要を簡単に整理します。

舟運セッション(3/17午後)

(行事名 : Inland waterborne transport: Is inland waterborne transport the sustainable future?)



舟運セッションの様子

「国際舟運協会(International Navigation Association (PIANC))が主催となり、持続的社会的の実現に向けた舟運の活用に関する講演と意見交換として、PIANCの概要紹介の後、セルビア、メコン委員会、コンゴ、ドナウ川、アメリカ工兵隊等の講演、その後パネルディスカッションが行われました。

舟運事例では、舟運を維持するための河川管理やステークホルダーとの調整に関する各国の取組み事例が中心に紹介されましたが、基本的に古くから内陸舟運が利用されてきたエリアでの話題であり特に目新しさは無かったように感じます。

一方、PIANCやアメリカ工兵隊の講演における、舟運を統合的水資源管理(IWRM)や国連開発目標(MDGs)、また温暖化やエネルギーの問題と明確に関連付けて捉えるアプローチは参考になりました。内陸舟運を復活、活性化させていく上で、地域的なニーズとの合致は当然のことながら、世界的な潮流ときちんと歩調を合わせて(逆行しないこと)進めていくことの必要性を感じました。

なお、このセッションには、皇太子殿下も聴講

者として参加されていました。

生態系と水セッション(3/20午前)

(行事名: Ecosystems for water, Water for People, Ecosystem for People)



生態系セッションの様子

持続的な水の利用と生態系の保全の両立について、スイス、オランダ、スリランカ及び日本からの事例紹介の後、約1時間半の議論が行われました。

セッション自体は流域上流部の森林保全を中心に水環境や生態系保全の議論がなされていましたが、特に、(水に関わる)生態系の保全と統合水資源管理(IWRM)や国連ミレニアム目標との関連付けについて、盛んに意見交換が行われていました。

世界的な潮流として気候変動に向けた適応論(adaptation)が議論される中で、環境問題、生態系問題もどの様に気候変動に適応していくかの立ち位置を定めることが、河川環境改善の取り組みを推進していく上で不可欠と感じました。

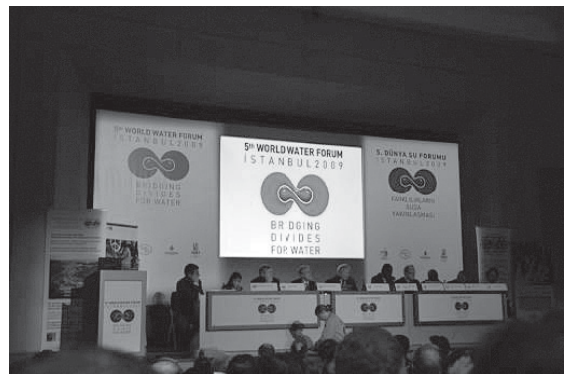
越境河川・地下水管理セッション(3/20午後)

(行事名: How can cooperation over transboundary surface and groundwater resources be achieved in a sustainable and equitable manner?)

INBO (International Network of Basin Organizations) とユネスコが主催で行われた

越境河川の水資源管理に関するセッションで、国際機関や国際ネットワークの代表者による8つの基調講演と7つの講演、及び意見交換で構成されていました。

流域や国を跨ぐ水資源(表流水+地下水)の管理を如何に実施するかについて、各組織で培われた教訓と提言が各スピーカーより紹介され、技術論とは別のアプローチで、複数の国や機関が共同で河川流域の問題を改善していくノウハウが凝縮された内容でした。



越境河川管理セッションの様子

第5回水フォーラム閣僚宣言と河川再生の関連
今回の世界水フォーラムの成果である「閣僚宣言」として、22の宣言文が公表されました。

この中で、河川環境再生やこの分野のネットワーク活動に特に関連すると思われる部分を以下に抜粋させていただきます。(「国土交通省土地・水資源局」ホームページ掲載の閣僚宣言仮訳より引用)

冒頭でも触れましたとおり、今回のフォーラムにおいて、河川環境改善や生態系保護といった問題は決して中心テーマではありませんでした。しかし、世界的な水問題解決の重要なアプローチとされている「統合的水資源管理(IWRM)」を推進していく上で、河川環境も重要な要素であることが以下の宣言文より理解できると思います。

【第5回世界水フォーラム閣僚宣言（仮約）より、河川再生や国際ネットワーク活動に関する部分を抜粋】

1. ミレニアム開発目標など、国際的な合意に基づく目標を達成するための取組とともに、あらゆるレベルにおける適切な施策と十分な財源の確保を通じて、可能な限り短期間で、安全で清潔な水、衛生、保健衛生、健全な生態系へのアクセスを改善する取組を強化する。

2. 各国における河川流域、地下水における総合水資源管理（IWRM）の実施を更に支援する。このため、必要に応じて、国際協力を通じ、経済、社会及び環境面からの要請に公平に対応し、とりわけ、世界規模の変化による影響に取り組む。その際には、利害関係者全員の利益を考慮し、意思決定や計画に参加型プロセスを用いるとともに、全ての関係者が恩恵を受けられる形で解決の実現を図るために関係者相互間のよりよい関係の創出に努める。

5. 世界規模の変化が水資源、水循環や生態系に及ぼす影響について理解を深める。水に関連する森林の機能の強化のため、新たなメカニズムや林業従事者との連携関係を活用して、環境流量の保全、生態系の回復力の増進、劣化した生態系の回復に向けた取組を行う。

14. 水分野における科学的研究、教育、新たな技術の開発とその採用、技術的な選択肢の拡大を支援し、持続可能な水資源管理の実現に向けてこれらの活用を推進するとともに、社会の適応力と許容力の強化を支援する。水に関する諸問題に関する技術、実践、プロセスの普及など、開発面、適用面、普及における国際協力、そして水と衛生への世界的なアクセスを改善するための科学的、技術的、社会経済的その他の研究における国際協力を推進する。

17. 国際機関に呼びかけ、持続可能な水資源の再生、保護、保全、管理、利用に関する経験を広め、優良事例の共有を促進するための、国際的な取組を支援する。

22. 最後に、水が分野横断的な問題であることを認める。そのため、最上位の政治レベルを含め、水分野以外に我々のメッセージを伝達する。能力開発と一体となった、革新的なガバナンス、総合的な水政策、法的枠組、分野横断的政策、資金調達メカニズム、技術の整備を進めるべく、この問題のフォローに最善を尽くす。

おわりに ~イスタンブールからのメッセージ

最後に、今回の世界水フォーラムが開催されたトルコ最大の都市・イスタンブールの街の様子を、写真を中心に簡単にご紹介させていただきます。

かつてはローマ帝国やオスマン帝国の首都として栄え、現在に至るまで約2000年もの歴史を刻むイスタンブールは、世界で唯一、アジアとヨーロッパの接点と名乗ることの出来る国際都市です。

また「水の都」と呼ぶに相応しく、町の高台からはボスポラス海峡をはじめとする水辺を周囲に見渡すことができ、西洋文化と東洋文化、そしてイスラム文化が混在した独特の香りを味わうことができました。

このような地理的にも歴史的にも重要な役割を果たしてきたイスタンブールの地において、世界の水問題解決に向けたイベントが開催された意味は非常に大きいと思いますが、会議は問題解決に向けた第一歩でしかありません。

日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）は、常に水分野の世界的な動向にアンテナを張りつつも、河川再生に関わる地域に根ざした情報整備や技術の蓄積、またイベント等の地道な活動を通じ、日本国内及びアジアの良好な水環境の再生に今後も貢献して参ります。



街中の繁華街の様子



ヨーロッパ大陸とアジア大陸を跨ぐボスポラス海峡
(手前がヨーロッパ側、奥がアジア側)



市内の橋でアジアボラを釣る人々



4世紀に建設されたヴァレンス水道橋



URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は「団体・個人会員(無料)」を募集しています!

「日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)」は、河川環境再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい水辺再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に、(財)リパーフロンティアセンターが2006年11月に設立した団体です。また、日中韓で設立した「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時にアジアの素晴らしい取り組みを日本国内に還元する役割も担います。

会員に関する詳しくはこちら <http://www.a-rr.net/jp/info/member.html>

多自然研究はこんな情報誌です

読者の方々からの投稿により紙面を構成します。

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に登録していただいた方々の情報交換・交流・発表のための雑誌です。情報を全国に伝えたい人に、集めたい人に、知りたい人にフルに活用していただきたい『多自然研究』です。多自然研究は幅広いネットワークの情報誌

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に住所、氏名等を登録していただければどなたにでもお届けします。全国の研究者、研究機関、活動グループ、コンサルタント、行政部局、企業、川づくりに関心を有する方々などを幅広くネットワークします。

毎月1回お届けします

『多自然研究』は毎月1回、年12回発行します。ですから、新しい情報が全国に素早く伝わります。『多自然研究』はリバーフロント整備センターから皆様へ、毎月直接郵送によりお届けします。

登録の方法

登録は簡単

『多自然研究ネット』への登録は簡単です。葉書に住所、氏名、連絡先、自己PR、会員の種別(法人・個人)をご記入の上、リバーフロント整備センターあてに投函して下さい。当センターへ到着した翌月から多自然研究をお送りします。なお、毎月25日以降の到着分の葉書につきましては、事務手続きの都合のため、翌月扱いとさせていただきます。また、特にお申し出のない限り、登録は継続させていただきます。

会費

年会費(4月から翌3月まで)は、個人会費が3千円、法人会費が1万5千円です。グループの方は個人、法人のどちらでも登録できます。なお、年度途中の退会の場合、一旦納入された会費はお返ししません。

特典

「多自然研究」に掲載された原稿執筆者には、**図書カード ¥3,000円を贈呈**します。

「多自然研究ネット」会員の皆様の投稿をお待ちしています。

会費の振込

年会費の振込は、毎年6～7月に郵便局の振込用紙をお送りします。事務処理上、特に支障がない方は、この振込用紙を使ってお振込みください。振込手数料はかかりません。なお、近くに郵便局がない方、事務処理上銀行でないと困る方は、下記の口座にお振込下さい。

みずほ銀行新橋支店 普通預金 1724589 財団法人リバーフロント整備センター
三菱東京UFJ銀行本店 普通預金 7659022 財団法人リバーフロント整備センター
郵便振替貯金 00180-3-405375 財団法人リバーフロント整備センター書籍口
なお、新規に登録いただいた方には、当センターより請求書、振込用紙をお送りいたします。

投稿のルール

投稿はご自分やご自分の所属する団体の活動、研究の成果を会員に広く知っていただくことを目的としています。上記の趣旨に合致しない場合は掲載いたしません。また、紙面の都合上、投稿の一部しか掲載できない場合があります。これらについては編集部が判断しますのでご了承ください。

投稿の受付は随時行っていますので編集部までお問い合わせください。

【お問い合わせ】

財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部 丹内、伊藤(将)
tannai-m@rfc.or.jp

多自然研究 第164号

平成21年5月1日発行

編集 財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部

発行人 竹村 公太郎

発行所 財団法人 リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8 一番町FSビル3階

TEL 03-3265-7121 FAX 03-3265-7456

ホームページアドレス <http://www.rfc.or.jp/>

印刷 西印刷株式会社
